

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

## 第31回 みつ はし けん もつ 三橋 監物

### 研究者を志す

三橋監物は明治38(1905)年、印旛郡成田町成田(現在の仲町)に父吉兵衛、母げんの三男として生まれた。

実家は成田山一粒丸本舗(現在の一粒丸三橋薬局)として江戸時代から続く薬局であった。監物の名は、江戸時代に天皇家の侍医にまでなった三橋家の初代・監物にちなんで付けられたといわれている。父や薬局を継いでいた兄から薬学で功名を立てることを期待されて育った監物は、幼い頃から学業に励んだ。

大正12(1923)年、成田中学校(現在の成田高校)を卒業すると、仙台の旧制第二高等学校(現在の東北大学)理科乙類を経て、東京帝国大学(現在の東京大学)医学部薬学科に入学。鎮痛薬の研究を行った。当時は中毒性の高いアヘンやコカインが使われていたため、投与された患者が中毒を引き起こすことが問題となっていた。そういった状況を打開しようと、多くの研究者が非麻薬性鎮痛薬の開発に取り組み、監物もその一人として卒業後も大学に残り、研究を続けた。

### 薬学一筋に

昭和11(1936)年、監物は富山薬学専門学校(現在の富山大学)に教授として赴任した。戦時中の物資不足の中でも何とか研究を続けていたが、同20年に空襲で校舎が焼失。旧制富山



成田山表参道にある  
一粒丸三橋薬局

明治38年～昭和55年(1905～1980)

印旛郡成田町成田(現在の仲町)に生まれる。東京帝国大学(現在の東京大学)医学部薬学科を卒業後、研究者として非麻薬性鎮痛剤の開発を目指した。富山薬学専門学校(現在の富山大学)の教授となり、助手らとともに鎮痛薬「エプタゾシン」を完成させるなど薬学界に大きく貢献した。



高校(現在の富山大学)の教室を研究室として借りることとなったが、研究ができる状態ではなく、文献を読む毎日を送った。そんな中でも研究への情熱を持ち続け、熱心に学生の指導に当たった。監物は多くの人々の信頼を集め、名物教授として親しまれた。

富山薬学専門学校は、昭和24年に学制改革により富山大学薬学部となった。物資不足により苦難が続いていたが、監物は非麻薬性鎮痛薬の開発こそ薬学を研究する者の使命であるとして細々と研究を続けた。

戦後の復興が進むと、監物は「中枢性鎮痛剤の化学構造と薬理作用の関係」をテーマに本格的に研究を開始した。そして助手らとともに、非麻薬性鎮痛薬「エプタゾシン」を完成させた。この薬は現在でも医療機関で緩和ケアのために使用されている。

監物は富山大学薬学部長、学長事務代理を歴任し、昭和46年に退職。同大学名誉教授となった。さらに、これまでの功績により日本薬学会教育賞を受賞し、日本薬学会有功会員となった。翌年、千葉に戻った監物は研究実績と指導力を認められ、千葉大学薬学部や昭和大学薬学部講師、城西大学教授として後進の指導に当たった。

昭和51年、監物は日本の薬学と教育の分野において多大な貢献をしたとして、勲二等瑞宝章を受章した。そしてその4年後、75歳で生涯を閉じた。薬学一筋に生きた生涯であった。

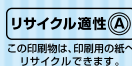
### 編集後記

本格的に寒さや空気の乾燥を感じる季節になりました。ドアノブに触れた瞬間「バチッ」。誰もが一度は静電気を感じたことがあると思います。静電気は湿度が低くなるほど発生しやすくなるため、空気の乾燥する冬場に多くの人々が悩まされます。静電気を防ぐためには、金属製の物に触れる前にコンクリート製の壁や木製の家具などに触れることが効果的なんだそうです。皆さんもバチッとなる前に試してみてください。

令和2年1月15日号 No.1403

成田市のホームページ

<https://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。